

2010年7月5日（月）17時～ 勉強会レジュメ 作成者：想田瑞恵

息苦しさの正体

脱「碇シンジ」のために対話の可能性について考える

90年代後半、テレビ東京系列で放映された「新世紀エヴァンゲリオン」が、一大ブームとなった。社会現象となるほどのヒットとなった背景には、主人公である碇シンジ少年に対する世間の共感もあったのではないかな。碇少年にとっては、汎用人型決戦兵器に乗って地球を救うことよりも、内面の葛藤・自分の気持ちのほうが大問題であるため、戦うことができず立ち尽くしてしまうのだ。そういう見方も可能だろう。かくいう私がそうである。「今ここでの」自分の気持ちは何よりも大事で、それ以外に信じられるもの・従うべきものなど見いだせない。他者とは、自分の気持ちを害する恐ろしい存在であると思っているのだ。このような苦しさから抜け出して、脱「碇シンジ」の道を探したい。対話は、活路となりうるか。

○「自分の気持ち至上主義者（＝私）」とは

自分の基盤が個性としての気持ち（感受性）であるため、気持ちに絶対的な価値を置く。「自分が特別な存在である根拠」として個性を捉え、「あるがままがすばらしい」という言葉で、むき出しの感受性に価値を加えようとする。

- ・ 毎日ひどく疲れ、苦しい…自分も他人も信頼できず、周りは敵ばかり
- ・ 閉塞感…「育て方が悪かった、教え方が悪かった」との言葉に対抗する術を持たない
- ・ 不安定さ…変化ではなくただ流されていく。自分の支え・碇となるものがない
- ・ 対話の拒絶…個性にすぎり、「気持ちを傷つけられることは、自分という存在の否定である」と思い、自分の気持ちを武装防御する→毎日がひどく疲れ、苦しい

○「自分の気持ち至上主義者」が見せかけの対話しかできない理由

なぜ見せかけの対話かと言えば、「自分の気持ち至上主義者」にとって「対等」とは要求するものであるからだ。彼らにとって「対等」とは、「みんながオンリーワンで特別だ」ということなので、「あなたが自分のことをオンリーワンと思って、自分の気持ちに基づいた意見を述べるなら、私の気持ちに基づいた意見も不可侵なオンリーワンであると認めなさい」と要求する。つまり、対話で言うところの、自分の実感をこめた（気持ちに基づく）意見とは、彼らにとっては、「自分オンリーワン宣言」なのだ。「私はこう感じた」と表明することで、「あなたとは違う私」という形の個性を確認しているにすぎない。ゆえに、彼らの考える「他者の尊重」とは、自分の根幹である気持ちに介入しないことであり、意見は単なる宣言であるため、合意に向かおうとする意志はない。

○「自分の気持ち至上主義者」の人間関係

揺らぎ流動する気持ちが自分の軸であるから、予定調和で、気持ちが傷つけられない関係を常に期待する。ゆえに、自分に都合のいい人や感受性のあう人しか見ようとしない。私の気持ちを傷つける人とは、すなわち、私の存在を否定する人であるから、全力で関係を絶つのだ。また、自分中心の世界なので、人間関係は、「特別である自分とその他大勢」である。同時に、他人は、私の特別な個性を確認するための道具であるため、他人の価値は低い。自分の意見の基盤は、たまたまわきあがった利他的な感情なので、肯定されても、自分の信頼（自己肯定感）にはつながらない。まして、相手は単なる道具なのだから、なおさらだ。かといって、否定されたらどうしようもない。黙っていては自分が特別であると確認できないのだが、言葉を交わすごとに、焦燥感に苛まれることになる。

○「自分の気持ち至上主義者」の責任逃れ

6月29日の哲学演習で、私は、私の発言を発展させてくれた人の意見に対し、「それは私の意見ではない」と主張した。そして、「想田さんの意見」から「想田さんに始まる意見」に言い方を変えてもらった。発展させてくれた人の意見を「私のもの」として取り込むことは、相手の意見に介入する（「尊重」していない）悪いことに思えたのだ。しかし、この思いの根本にあるのは、「責任逃れ」の発想ではないだろうか。発展内容に対して、私は責任を持ってない、持ちたくないといっているのだ。こうして、責任から逃れたい「自分の気持ち至上主義者」は、責任の所在をはっきりさせる対話を、もちろん試みようともしない。そればかりか、「自分オンリーワン宣言」とは、責任を伴わないで言える「自分ナンバーワン宣言」だったことがわかる。「そう思った」という事実は否定しようがなく（たとえ「あいつを殺してやりたい」でも）、その事実に対して、他人は正当も不当も言うことはできないからだ（思ったという事実の表れとしての振る舞い・言動に対してしか言えない）。また、流され触発されて起こるものである気持ちに対し、責任の追及はできないため、「そう思った」ということを宣言している限り、私に責任は生じない。ゆえに、「みんなちがってみんなそのままでもいい」は、最高の責任逃れなのだ。

○責任逃れの蟻地獄

こうした責任逃れの観点から、「自分の気持ち至上主義者」の行動を見直してみると、彼の感じている息苦しさの正体が見えてくる。触発される気持ちに自分の根拠を置くならば、「育て方が悪かった、教え方が悪かった」との言葉に、抵抗することはできない。「親や教師以外にも影響を受けている」という反論も、ここでは本質的な反論とはならない。「周囲の人間や物に触発された気持ちが自分のすべて」という考えが根本にあるからだ。「特別な自分」を求めていたはずが、「自分とは自由意志を持たない単なる物である」ということになってしまった。経験という過去の刺激を絶対化し、トラウマをいそいそと持ち出してくることは、自らを因果の鎖につないでいるのと同じことなのだ。結局、「自分の気持ち至上主義者」

は、他でもない自分自身を、人格ある（自由ゆえの責任持つ）存在とみなしていないことになる。合意ではなく共感で物事を解決しようとするのも、そのためであろう。流れ行く気持ちなら後から責任を問われることもないが、それ以上に、合意に達せられるだけの人格が存在していないのだ。自分は単なる物なので、自己肯定感が薄く息苦しいのも当然である。言葉を交わすごとに追い込まれる気がするのも、ほめられることに対して警戒心を抱くのも、自分の言葉に責任を持てないからだ。

○対話の可能性

私に一番足りなくて一番必要なものが、責任である。しかし、先ほど確認したように、私には、自分が生きていることに対して、いかなる責任もない。気持ちも、気持ちに沿った言葉（実感をこめた言葉）も、結果としてあるだけなのだ。それなのに、なぜ対話においては、「正しい」意見や否定される意見があるのだろうか。それは、対話では、まさに相手を人格として扱っているからである。相手が自由な人格だから対話しようとするのであり、ロボットと対話しようとは思わない。ゆえに、実感に基づく意見が否定されることは、単なる損や不快ではない。責任ある人格が否定されたわけではなく、むしろ、責任ある人格とみなしているゆえに起こることだからだ。「自分には何の責任もない世界」において、自分であることを引き受ける覚悟こそが、「責任」である。

○でもやっぱりわからない！

以上のように、良い子になって、あるいは、檜垣先生のゼミの方々に受け入れてもらいたいと思って、ここまでまとめてきました。しかし、旧参加者として、2010年度西洋思想の授業用ホームページを見ていたところ、大いに共感し、勇気付けられました。そこで、そこからいくつか意見を取り上げさせていただきましたが、「私の気持ちを表してくれた！」との思いで引用していますので、文責は私にあります。私の気持ちとは、つまり、「対話なんてできるわけがない！」。

・学生Iさん

「私は方法論としては、〈対話〉は有用なものに違いないと思うのです。しかし、それは、ある程度、言葉に自身（「自信」の変換ミスか）があったり、意見を表明することが苦にならない人々に関してのことであり、そうでない人間にとっては、それはどこか間違っている、ところがあるのではないかと漠然と感じられました」（5／27）

「先生に恐縮する態度や、発言をせずに物事を進めてしまう態度の原因は、遺伝子やら儒教伝統やら、様々な要因があると思われる」（6／3）

→確かに、経験が思考に与える影響は大きい。「経験によって思考する」と言いたくなるほど大きい。だから、対話を有用なものとして使えるような経験をした人は優位な気がする。私も、「個性とか承認とか渴望しないで済む人は、なんてうらやましいのか、なんて不公平なのか」と思う。「責任の受け入れやすさ・自分であることの引き受けやすさ」に差はある

し、「引き受けよう」という意志もまた、経験に由来する。しかし、自己肯定感を得るためには「引き受けねばならない」、このことだけは平等なのだ。この辺りに飛躍がある。経験に由来する意志で、なぜ自由が得られるのか。

・学生Kさん

「普遍的なものはないはずです。(略) 私がこう意見する背景に、『それ相応の〈根拠〉』というものは私は用意できません。(略) おそらくその根拠は感受性であるからです。それを『誤り』として否定されるのであれば、(略) 〈対話〉の成立条件である〈対等〉にはなりません」(6／3、以下も同じ)

・学生Hさん「みんながばらばらの意見を持っていることにこそ価値はある」

・学生Tさん「一定の内容を伝えようとする点では、先生と私たちの関係は対等ではない」→上記のような意見を突き詰めると、「合意を目指す意味などない。人はわかりあえない」という主張になるだろう。このような主張をする人は、わかりあえないゆえに、対立を明確にすること(=争い)を避けようとする。しかし、対話は、そうした努力をことごとく破壊する。この破壊の根拠は、「合意は目指すに値するものである(普遍を信じられる)」という考えであろう。しかし、もしも、この「合意は目指すに値するものである」という考えを支えるものが、個人の感受性や経験でしかないのなら(少なくとも私にはそう思える)、この考えは、実は、感受性・経験そのものを否定することになるのだから、「合意を目指すに値するものである」という考えを、本当は受け入れられるはずがないのだ。当然対話も認められない。ゆえに、私には、対話をする人は自己欺瞞をしているとすら思えるのだ。